

2017年12月10日〈待降節第2主日礼拝〉 飯川雅孝 牧師

招詞：ルカ1章34－8節 聖書：ルカによる福音書1章46－56節

説教： 『イエス誕生への備え』

1. アドベントとクリスマスの時

アドベントも第二週に入りました。キリストの誕生を迎える、わたしたちはこの時をどういう思いを持って過ごしたらよいのでしょうか。わたしには20年前に上映された大島渚監督、日本、英国、オーストラリア、ニュージーランドの合作映画、「戦場のメリークリスマス」が印象的です。音楽家としても世界的に有名なデヴィッド・ボウイやビート・たけし、日本の音楽家の坂本隆一が出演しました。捕虜収容所で反抗したイギリス人捕虜デヴィッド・ボウイが故郷のこと、愛する知的障害のある幼い弟と遊んだことを思い出しながら死ぬ場面が印象的です。そこでは敵国になった軍人たちの友情も織り交ぜた悲哀こもごもの緊張感があります。無線機を無断で所持した、ということはスパイ行為として判断される、イギリス人捕虜が処刑されるはずだったのに、クリスマスの日には彼らを管理する立場にある、荒くれ男の軍曹のビートたけしが彼らと呼び出し、たけしが大変酔っぱらっていて、「釈放してやる、自分はサンタクロースで、これはクリスマス・プレゼントだ。」と言います。捕虜は期せずしてこの荒くれ男に命を救ってもらったわけです。ビートたけしはじめ、冷酷な日本軍の収容所の軍人たちにはアドベントもクリスマスの本来的の意味を理解しているとは思いません。しかし、キリスト教国との合作映画ですから、幼い頃からその土壌に育った外国人キャスト達には、日本人キャストとは違った意味でそれを受け取ったと思われます。いずれにしても、神を知らない粗暴な世界でもクリスマスは「人に何か良いやるものをやる、よいことをしてやる」ということが理解されてときがあることはありがたいことです。ですから、クリスマスは世界中の人々にとって、その意味がわかって分からなくても、とにかく喜びの時であります。

2. アドベントとはキリストへの感謝を考える時である。

しかし、主イエス・キリストに従う志を持つ者にとっては「自分の中に存在する暗闇に住み、自分を救って下さるキリストに大きな光を見て、死の陰の地に住んでいたところから救われた。」という大きな体験をした喜びの時であります。ですから、このアドベントの時とは魂の暗闇とキリストによる救いの両極端を知る時であります。そのために、ヨーロッパでは、キリストの生誕を待つ思いを強めるために、断食や祈りの緊張した時を意識的に持ったのであります。そこで、今日の招詞と聖書箇所、受胎告知とマリアの賛歌から学び、アドベントの時を整えようと思えます。

3. 受胎告知とは神の栄光が身に及ぶこと

マリアに天使が受胎告知をした時、大きな戸惑いを感じ、考え込んでしまいます。そこから天使との会話が始まります。天使とは、神の使いです。ユダヤ人にとって神は命に関わる畏れ多い存在、ですから天使は神と人との間を執成す役目を担います。天使は「恐れるな。」とあって、まず、マリアを自分と会話する場に立たせ、あなたは男の子を受胎するが、人類としての一大使命を帯びた神の栄光が身に及ぶこと、それはしかもその意味を神の子イエスの母親として、神の栄光を一身に受けることであると言います。しかしその在り方は、いままで考えられない形で身に及ぶこと、それは人間の営みを越えた神の業であることを伝えます。天使がマリアがこのとてつもなくありそうもない出来事に戸惑わないように配慮して、親類のエリサベトにも神の力が働いて子どもを産むことを伝え、マリアの信仰を励まします。

4. 神の栄光を受けた者はその感謝としてキリストに従う道に導かれる。

ここに至り、彼女は臆することなく決断します。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」わたしは、ここにマリアに培われていた、ユダヤ人の1000年以上に渡る敬虔な信仰を見ます。神がご自分の計画を成就されるに当たって、なぜこの卑しいマリアというおとめを選ばれたのかということ。それは、あのエジプトの奴隷から解放されたイスラエルの民にシナイ山の麓で神が語られた「あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。(申命記7章6-7節)」と語られた。この時とマリアの受胎には、1000年にわたるユダヤ人の信仰の継承がマリアに神の栄光として臨んだ意味を持ちます。マリアはその栄光をいただいたからこそ、その救いの言葉を素直に受け入れ、感謝して自分を神に捧げる決断をします。それは一民族としてのユダヤ人を越え、全人類一人一人が神にとって大切なものであるという励ましを代表して受けているのではないのでしょうか。旧約の預言はイエスの母となる女性の心によって成就されたことを感じるのです。このマリアの自分を捧げる信仰は親類のエリサベトによって、「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、マリアよ、あなたはなんと幸いです。」という言葉で証明されております。このようにして、神の創造の業の栄光に浴したマリアは神への感謝の徴として賛歌を歌います。「わたしに偉大なことをなさいましたから。その御名は尊く、その憐れみは代々に限りなく、主を畏れる者に及びます。主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた

人を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます。」マリアのこの世を支配する神のみ力を称え、神に感謝を捧げる喜びの歌は、何を意味しているのでしょうか。それはわたしたちがこの世に従って生きた生き方から、十字架の主に従って生きる生き方への転換することを促すことを意味します。キリスト者がこの世の抵抗にあうことは当然と言われます。なぜなら、イエス・キリストに従い、十字架を負う者は必ずこの世の抵抗に遭う。しかし、その者にはキリストによる生きる道が用意されている。今、その中に主イエスが祝福され共にいて力を与えて下さっていることへ参加していることを語っています。ルカはそれを自身の言葉で、6章の20-23節で言い換えております。マタイと同じように、山上の垂訓と言われます。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる。人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。」

5. あらためてクリスマス・プレゼントとアドベントの時とは

以上のマリアの受胎と神への賛歌の意味を理解した後、「戦場のメリークリスマス」の物語をもう一度見てみましょう。かつて、酒に酔った軍曹ビートたけしがクリスマス日に捕虜の処刑を赦してやったことがある。そして、敗戦が明らかになると日本軍と外国軍の収容所の立場は逆転します。今までふんぞり返っていたビートたけしも死刑囚となって独房に入れられます。彼が処刑される直前に、以前助けたそのイギリス人将校が分かれにやってきます。その時、たけしは首に数珠をかけ、死ぬ覚悟をしています。しかし、たけしは彼に「メリークリスマス。メリークリスマス。ミスターロレンス」と言って、最後の分かれをします。それは、「日本軍人はお前たち外国人のように命乞いをしない。」とかつて言っていることから、死の分かれか、あるいは、あの時お前の命を俺が救ってやったように助けてくれよと言っているかどちらかは分かりません。しかし、ここには感動的な分かれがあります。そして「メリークリスマス」、「イエス・キリストの誕生を祝す。」とは、わたしたちの生き方を自分中心の生き方から、キリストに従って、奉仕することに変えること。そこには大きな喜び待っている。神からいただいたものへの感謝として、わたしたちに対して、社会にそして教会に、捧げる気持ち持つように促している。アドベントの時をそのような意味で受け止めたい。そう思うのであります。